

安倍晋三総理が「美しい国、日本」というキャッチフレーズを出された時、漢方医学を専門とする立場として非常に嬉しかった。

私自身のことを述べさせていただけると、内科医でありながら、なぜ漢方医学を専門としているかという、第一に患者さんのためには両医学が必要だという思いであるが、国際的活動をしているうちに、漢方医学という

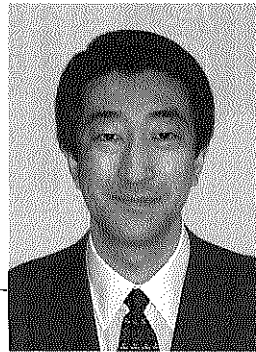
日本独特の文化を次世代に受け渡すことで、日本人の誇りを取り戻したいと願うようになった。その思いが安倍総理の「美しい国、日本」にぴったりと重なったのである。

パブルがはじけた後、日本が何となく元気がなく、胸を張って「日本人です」ということが言え

なくなっているように思われる。社会もいろいろと病んでおり、勢いがなくなり、特に子供たちは元気がなく、これから日本はどうなるのだろうかと思わずにはいられない。

なぜ、そのような社会になってしまったのか。自国に誇りを持っていないのはなぜなのか。い

慶應大学医学部助教



漢方シリーズ ⑩

渡辺賢治

漢方医学で美しい国、日本を

りで、もっと日本発の世界貢献をすべきと考えていたからだ。

イノベーションという言葉に代表されるように、目先の技術革新では欧米から学ぶことが多いが、果たして10年、20年先のイノベーションで医療の本質が変わることがあるであろうか？。病人

だ者を治す、という医療の本質そのものは洋の東西を問わず、歴史的にも共通の使命である。

漢方医学では未だに『傷寒論』『金匱要略』

という1800年前の本をバイブルのようにして界にもっと知られるべきである」というのである。これには正直嬉しかった。なぜならば、日本の医学は欧米に学ぶばかりでは変化していない

のである。もちろん、この1800年の間にも豊かな時代もあり、貧困の時代もあり、時代々々で少しずつ頻用される漢方薬が異なってきた。しかし、治療の本質はほとんど変化していないと言ってもよいであろう。

米国から来た医師・医学生は日本に伝来してから1500年もの間、発展してきた医学体系に対して尊敬の念を隠さない。安倍内閣の打ち出すイノベーションがどのような形になるのかは興味深い、目先の変化にとらわれない、日本らしい歴史・文化を重視するイノベーションにしてほしいと願っている。そして、日本の伝統医学である漢方医学を見直し、世界保健への貢献につなげてほしいと思う。

ろいろと疑問に思っている時に、自分の専門である漢方医学を通じて何かできるのではないかと考えるに至った。

漢方医学を学びに来る。米国の内科助教教授であったり、レジデントであったり、医学生であったり、最近では医学部志望の大学インターンも来るようになった。彼らが口

を揃えて「漢方医学は優れた医療体系であり、世界にもっと知られるべきである」というのである。これには正直嬉しかった。なぜならば、日本の医学は欧米に学ぶばかりでは変化していない